

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

An Statistical Analysis of the Attic Museum Collection

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004448

アチック・ミュージアムの足どり

—収蔵原簿の分析から—

中 村 俊 亀 智*

An Statistical Analysis of the Attic Museum Collection

Shunkichi NAKAMURA

The Attic Museum was founded in 1921 by Keizo Shibusawa. It was one of the first ethnological museums in Japan.

Shibusawa and his followers collected the folk tools and utensils of Japan, Sakhalin, Korea, China and Micronesia, and in particular foot-wear, clothing, farming tools, fishing implements, basketry and toys. His collection amounted to ca. 12000 specimens in 1937.

In this article indicate the tendency of inventory-accumulation by statistical analysis.

I. 報告の主旨

III. 全体的推移

II. 目録作成まで

IV. AMの3時期

I. 報告の主旨

アチック・ミュージアム（以下AMという）は、1921年、渋沢敬三氏を中心に結成された研究団体で、その活動は1937年、日本民族学会ならびに日本常民文化研究所にひきつがれるまで、およそ16年間つづけられた。

その足どりと我が国民民族学の発展にしめる役割については、これまでやや詳しく紹介されてきた [石田 1960: 1404-1405; 宮本 1973: 7-18] が、その膨大な刊行

* 国立民族学博物館第5研究部

物以外¹⁾、それを客観的に裏づけるような資料となると、これまでほとんど明らかにされていなかったといつてよい。

この報告は AM がのこした収蔵台帳（『民具標本収蔵原簿』10冊、現民族学振興会所蔵、以下原簿という）の分析をとおして、AM の民具収集からみた足どりを追ったものである。

原簿は、部分的に記載のやり方がちがいがい、記事に精粗があり、またほとんど誤記と思われる所もあり、そのままでは AM 民具収集全体の移りゆきを推しはかる材料とはなりえない。そこでここでは、何時、どこから、誰によって何が（何の民具が）AM にもたらされたかを示す事項を書きだし、電算処理によって一種の編年体収蔵目録をつくり、そこから全体の流れをうかがう素材をとりだそうと試みた。

Ⅱ．目録作成まで

原簿に登載されている民具の数は21,000点余。そのなかには AM の仕事を引きついで旧財団法人日本民族学協会附属民族学博物館収集の分が含まれるので、ここでは AM 収集民具の主要部分となった収蔵番号10,000番までの分をとりあげた。

原簿は1頁5点ずつ記入されるようにつくられ、各欄は上中下3段。上段に収蔵番号、中段は標準名、地方名、分類番号、採集地（字名まで）、採集者名、寄贈者名、採集年月日、収蔵年月日にわかれ、下段は備考となっている。そのうち分類番号は慎重をきしてついつかわれず、備考欄にはその民具の使い方、作り方、言い伝えなどが摘記されることになっていた。

ここでは編年体目録づくりのための一覧表形式の原稿を、記事の精粗ともならみあわせて、つぎの要領で書きぬいた。

(a) いつ 原簿ではその民具がいつ集められたか、それがいつ AM の収蔵するところとなったかを示す採集年月日と収蔵年月日とが明記されることになっている。しかし、ここではいつ誰によって何が AM にもたらされたかのおおよそが必要なのだ

1) 「終戦後の理事長（日本民族学協会理事長）渋沢敬三は、つとにアチック・ミュージアムとその附属研究所とを邸内にもうけて、日本における民俗学・民族学博物館の先鞭をつけるとともに、多くの研究者を養成・援助された。」[石田 1960: 1405] AM の出版物の一部分は今日、三一書房版日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』全24巻におさめられている。とくに第1巻民具篇、第9巻東北篇(2)、第10巻東北篇(3)、第11巻関東・北陸篇(1)、第21巻中国・四国篇(2)、第24巻九州・南島篇、それに第14巻中部篇には民具研究にかかわり深い著作が含まれている。高橋文太郎氏の都下保谷地域や秋田マタギの調査資料、吉田三郎氏の秋田県男鹿地方の2つの注目すべき記録（『男鹿寒風山麓農民手記』、『男鹿寒風山麓農民日録』）、秋田県角館町での武藤鉄城氏、鹿兒島県喜界島の岩倉一郎氏の聞きがきもそこに含まれている。

から、それに月日の記入がないものも多いので、とりあえず収蔵年次のみをとりあげた。

収蔵年次が記されていないものでも前後の書きぶりから、それを推定することができるものがすくなくないが、ここでは確実さを重くみて、推定はさしひかえることにした。

(b) どこで AM では、一貫して、その民具がどこで使われたかがとりあげられた。AM の収集方式では、標本資料としての民具はそれを使っている人からもらいうけるのが原則だったから、使われた場所（使用地・所用地）はたいいてい採集地に一致した。民具研究にある程度の見通しがたったのち、まだ使わない民具を店頭や作っている人から直接買う方式がとられたが、その場合、その民具の広がり（分布）や由来についての聞きとりが重視された。

原簿では都道府県名のみ明らかで市町村名ないし字名が定かでない場合、後の調査にゆだねることもあったらしいが²⁾、ここでは最大公約数的に都道府県名のみをとりあげた。なおそのために国外の分まで含めて2桁のコードを用意した。

(c) だれが 原簿では採集者（収集者）名と寄贈者名についての欄があるが、標本資料としてのその民具に価値をみだし、それをAMに送りとどけたという意味で、ここでは採集者名のみをとりあげた。

ある人がある年、ある場所でのどのような民具をどのくらいまとめて収集したかについても注意した。

(d) なにを、なぜ 原簿記載の標準名（標準的名称・一般的名称）には、いまではたやすく実体かと思いうかばないもの、表現の難解なものもすくなくない。そこで、ここでは思い切って親しみやすい名前にかえることにした。なおここでは国外の資料の場合も考慮して訓令式ローマ字表記をとり、地方名（呼び名）ははっきりわけて記入することにした。

以上をもとにして、とりあえず記憶をたよりにして分類コード（2桁の数字）を与えてみた（附表5A）。分類コードはいわゆるAM民具分類（1930年当時に民具を定義した際の外延的定義としてのべられているもの[AM 1936: 1-12]）をもとにした。本来ならひとつずつ実際に民具にあたって確かめながら番号をあたえなければならぬはずだったが、原簿には1938年以前すでに所在不明になっているものもあり、別に照合作業もすすんでいるので、ここではいちいち標本には当らなかった。したがって

2) 同じ態度は年月日や名前についてもとられた。民博では情報カード記入の際、推定の欄をもうけ、記入者の責任において出来るだけ、わかるだけ、とりあえず年月日や名前や土地の名を記録にのこす方法がとられている。

ここでの分類はあくまでもひとつの目安、暫定的なものである。

ここでは分類番号はひとつの民具についてひとつ。いわゆる分類の重複はしないことにした。AM ではたとえば年中行事につかわれる履物でも、その履物と日常の履物との形態上技術上の異同を明らかにするのに便利のように、年中行事の項にはいれず衣食住に係る民具の項にとりあえずいれていることがすくなくないので、ここでもそうしたやり方をまねてみた。

原簿には民具のほか武器・武具の類、若干の機器類、絵画や文書の類、写真、模型、動植物標本などが含まれている。ここでは一括してその他の項にいれた。

このような方針にもとづいて入力原稿をつくり、収蔵年次順採集地都道府県別採集名ABC順、標準名ABC順、呼び名・分類コード併記の目録をつくり、さらに収集が年ごとにどの地方に広がっていったか(附表1, 附表2, 附表3)、国内について年ごとにどのような民具が集められたか(附表4)をまとめてみると本文末の表がえられた。研究の深まりはある程度まで資料集めの量に反映し、資料の集積は研究の深まりに役だつものとすれば、これらの表からAMの民具研究の深まりについて何をよみとらねばならないのだろうか。

Ⅲ. 全体的推移

ここでとりあげた原簿10,000番までのもののうち、すでに抹消されていたもの、欠番(原簿に収蔵番号だけが記入されていてその他の事項の記載がないもの)³⁾などを除けば、のこりは8471。そのうち収蔵年月日がわかるものは7351となる(表1)。現在の人文系博物館なら、それは必ずしも多数とはいえないかもしれないが、これらの民具をもとにしてAM民具研究の土台が形成されてゆく。

その有様をたどるために7351点を収蔵年次ごとにまとめ、ここでとりあげた原簿の部分のほぼ最終年次にあたる1939年(AMの収集活動は1937年とともに終わった。しかし原簿にはそれまでにのれたもの若干が追加されている)までに到達した原簿記載の民具の収蔵点数(累積数)を100として、各年次までの累積の割合をみるとS字形の曲線となる(図1)。

3) 第1期では原簿の作成には渋沢家で働くいわゆる書生さんたちが一部たずさわっていたらしく、第2期・3期とも原簿づくりには決して充分な人手がまわされていたとはいえなかった。しかしそれ以外、記載すべき事項に調査もれがあり、後に書きこもうとして、そのままになってしまったり、同種同類の民具を同じようなところへ記入しようとしたあまり欠番になってしまうこともあったらしい。事実、原簿の他の部分ではいわゆる受け入れ番号のつけ方と収蔵場所を示す番号のつけ方をいっしょにしようとしている。AMではさまざまな新しい冒険がなされていた。

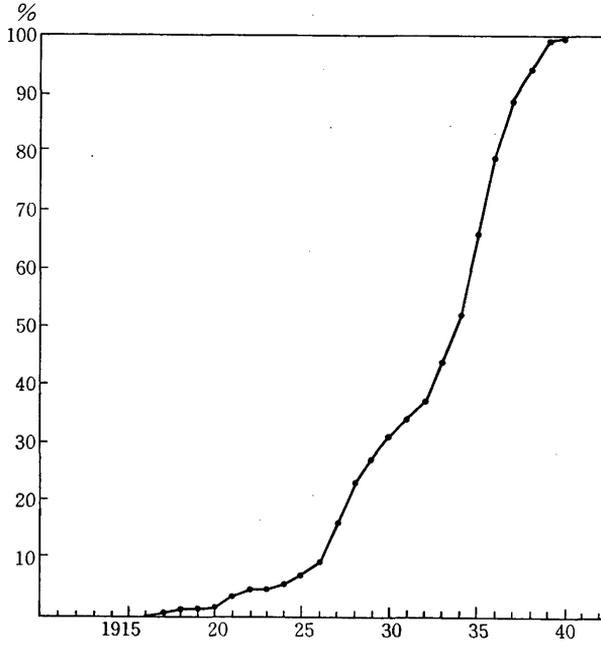


図1 AM 収集件数の移りゆき
実線は累積件数の推移を示す。

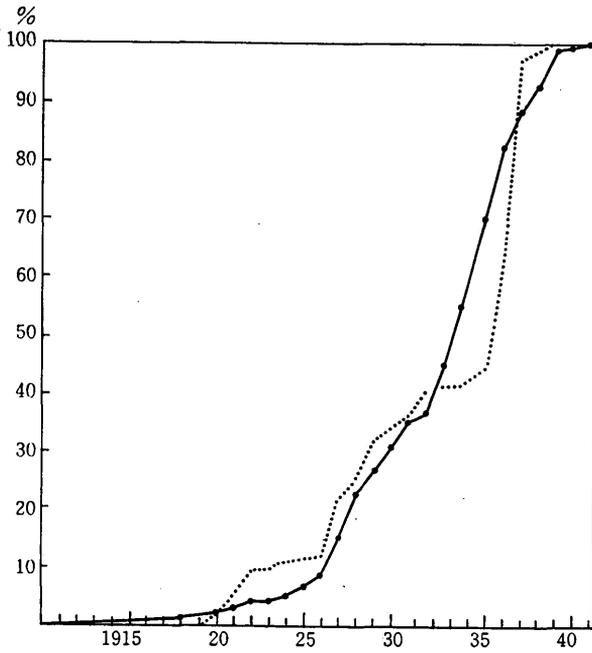


図2 国内外別収集件数の累積状況
実線は国内、点線は国外を示す。

この図1をこれまでに紹介されているAMの成長過程 [宮本 1973: 7-18] に重ねあわせてみると、ほどよく、三つの時期に区分することができる。

念のため各時期の年ごとの伸び率を勘定してみると第1期は0.8%でなだらかに、第2期は4.5%で日本経済の成長期なみ、第3期は13.8%となるので、いってみれば第1期は離陸ないし助走期、第2期は第1成長期、第3期は第2成長期といえよう。

第1期 1921年—1927年

第2期 1927年—1933年

第3期 1933年—1937年

Ⅳ. AM の 3 時期

1. 第1期 1921年—1927年

AMの民具収集はいわゆる郷土玩具の収集から出発した。もっともそれ以前には動植物標本の収集の時代があるという [宮本 1973: 7]。

AMの民具研究がひとつの曲りかどにさしかかった、すなわち郷土玩具の研究が飽和状態になり、本格的民具収集への転換がおこなわれた1927年を、仮りに基準年次にとり、その前後を5年ずつにわけ、それぞれ5年間にどれほどの民具が集められたかを計算してみると表2以下の表ようになる。(なお、基準となる年を多少動かしても以下の推測はそれほどかわらない)。

表1 台帳記載の内訳

(数字は件数、ただし百分比を除く)

* 収 蔵 番 号	採集地域						国 内	国 外	計	累 計	計 の 百 分 比
	収 蔵 年 月 日	採 集 地 名	採 集 者 名	一 般 名 称	呼 び 名	分 類					
○	×	×	×	×	×	×	601		601	601	7.1
○	×	×	×	○	○	○	86		86	687	1.0
○	×	×	○	○	○	○	44		44	731	0.5
○	×	○	○	○	○	○	313	76	389	1120	4.6
○	○	○	○	○	○	○	6002	1194	7196	8316	85.0
○	○	×	○	○	○	○	155		155	8471	1.8
1942年以後のもの							1	2	3	8474	100.0

* ○は記入されているもの、×は記入されていないことを示す。

これらの表からわかるように、第1期では身近な国内の民具が全体の7割ほどを、国外からのおみやげ品などもかなり高い割合をしめ(表2)、内容的には郷土玩具を中心に後に縁起物・玩具として分類されるものが圧倒的にたかい割合を示す(表5)。

この時期を原簿における採集者の面からみると、渋沢敬三氏を中心に1921年2月2日のAMソサエティの結成に加わる7人をはじめ、親族、友人、渋沢家につとめる人たちの名がみえる。ここではそのすべてを紹介するわけにはいかないから、記載の多い方々のなかからその収集の様子をうかがうために書き抜いてみる。1組の数字のうち前は採集地の都道府県コード(附表5B)、後の数がその年次の点数、^{*}は年次の切り目を示す。[]内はAMとのつながり。AはAM創設期の同人。Bは主として第2期以後に活躍した同人。CはそのほかのAM関係者。DはAMから刊行された

表2 採集地域の移りゆき

地域 収蔵年次	不明	国内	国外	計	百分比(%)		
					不明	国内	国外
1912まで	0	6	1	7	—	85.7	14.3
1912—1917	0	28	0	28	—	100.0	—
1917—1922	3	165	57	225	1.4	73.3	25.3
1922—1927	2	313	90	405	0.5	77.3	22.2
1927—1932	40	1584	280	1904	2.1	83.2	14.7
1932—1937	46	2866	328	3240	1.4	88.5	10.1
1937—1942	64	1040	438	1542	4.2	67.4	28.4
計	155	6002	1194	7351	2.2	81.6	16.2

表3 地方別採集件数の移りゆき(国内の部)

(数字は件数、ただし最下段の%を除く)

地方 収蔵年次	北海道	東北	関東	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	計
	不明	9	39	90	46	28	47	21	14	15	4
1912まで	0	0	3	0	0	1	0	0	2	0	6
1912—1917	0	6	9	2	4	5	1	1	0	0	28
1917—1922	0	24	45	15	11	53	0	2	15	0	165
1922—1927	0	43	175	14	31	17	3	14	12	4	313
1927—1932	8	280	453	47	477	142	23	23	99	32	1584
1932—1937	44	456	291	407	470	97	231	161	585	124	2866
1937—1942	0	209	217	72	71	74	227	82	86	2	1040
計	61	1057	1283	603	1092	436	506	297	814	166	6315
計の百分比	1.1	16.7	20.3	9.5	17.3	6.9	8.0	4.7	12.9	2.6	100.0

表4 地域別採集件数の移りゆき(国外の部)

(数字は件数、ただし最下段の%を除く)

地域 収蔵年次	朝鮮半島	中国大陸	台 湾	モンゴル	サハリン	シベリア	東南アジア	インド 西アジア	ヨーロッ パ アフリカ	アメリカ 大 陸	ミクロネ シア	ポリネシア オーストラ リア	計
不 明	0	38	26	0	1	0	3	1	7	0	0	0	76
1912まで	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
1912—1917	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1917—1922	18	31	0	0	0	0	4	2	2	0	0	0	57
1922—1927	5	37	5	0	0	0	2	15	21	4	0	1	90
1927—1932	87	110	14	0	0	8	20	8	28	1	3	1	280
1932—1937	280	10	34	0	4	0	0	0	0	0	0	0	328
1937—1942	25	7	398	0	0	0	0	0	4	0	4	0	438
計	415	234	477	0	5	8	29	26	62	5	7	2	1270
計の百分比	32.7	18.4	37.6	—	0.4	0.6	2.3	2.0	4.9	0.4	0.5	0.2	100.0

中村 アチック・ミュージアムの足どり

著作物の筆者（民具問答集 [AM 1937: 1-319] のもととなったいわゆる民具問答に参加した人たちを含む）。E はその他。

1912年—1917年

江木盛雄 08・1 20・1, 08・1 20・2 27・2 28・1, 13・1 [A]

宮本 璋 13・2 34・1, 0.5・1 10・1 28・1, 13・1 16・1 [A]

1917年—1922年まで

AM 29・1

江木盛雄 14・1 27・1 28・1, 20・3 44・1 [A]

宮本 璋 02・1 04・3 07・2 13・3 17・3, 20・1 23・1 28・1 40・2 42・1 43・1, 43・1, 13・1 22・1 28・3 37・1, 02・1 27・1, 16・1 [A]

宮本 璋 04・3 07・3 13・2 17・1 20・2 29・1 36・1 43・1, 28・3 [A]

渋沢敬三 11・15 13・1 04・1 22・1 27・15 40・1 [A]

渋沢 13・1, 04・1 06・1 21・1 27・8

1922年—1927年まで

AM 13・1 06・1 13・92 14・1 15・1 16・2 17・2 20・1 22・2 26・2 28・3 29・1 36・1 37・2 38・1 39・1 40・1 43・1, 07・1 22・1 26・1 29・2 36・1 43・1

江木盛雄 13・4 14・1 42・1 43・1 [A]

早川孝太郎 04・1 04・1 [B]

藤木喜久磨 11・1, 07・3 13・1 22・3 25・1 [B]

渋沢敬三 06・1 27・2 42・1 20・1 [A]

渋沢 04・1 06・4 13・17, 13・11

第1期は第2期以後への離陸の時期であったが、注目すべきことは、AMの同人のあいだから後の民具研究の基本線ともいべき方向づけがあらわれることである。研究はたんなるもの好きの収集におわってはならないこと。民具を学問的に、自然科学なみの厳密さでとりあげようとする態度。研究対象としての民具を類別し、それぞれが研究分担をきめ、共同の話しあいを通じて研究をすすめることなどがそれである。

1922年から25年までの渋沢敬三氏の横浜正金銀行ロンドン支店勤務。その間の中断ののち帰国とともにAM活動が再開され、そこではチーム・ワークとしての郷土玩具研究を旗じるしに馬・猿・独楽・牛・馬・蛇・履物などの種類ごとに、それぞれ分担をきめ、標本の整理を通して発生系統と変化過程を追い、ひいては文化の伝播発展の形式や原理をあきらかにするきっかけをつかもうとしていた[宮本 1938: 7-18]。その様子は原簿のはしばしにもうかがうことができるが、そうした研究に加わった人自身、充分満足すべき成果をあげることができたか、または当時のAMの研究が今日のいわゆる郷土玩具を研究される方々からみて、どれほどのものであったかは別に

して、そこには後の AM の研究を推進する原動力となる組織づくりへの着想が形作られていった。

2. 第2期 1927年—1933年

AM 民具研究が本格化した1927年頃から渋沢敬三氏が静岡県三津海岸に転地療養される1932年頃まで。この時期は図1からでは直接よみとることはできないが、おそらく1929年を境にして前後二つに分かれる。

前半期は第1期にもまして縁起物・玩具類の収集がすすみ、この分野での収集がひとまず坂を登りつめ、それに対して後半期は信仰・行事の民具として分類されるものや衣食住関係の生活関連の民具、それにわずかながら交通・運搬関係のものや生業生産にかかわる民具の収集が加わり内容豊富になってゆく。その有様は AM 民具分類にそくして原簿記載のそれぞれの民具を仕分けし、累積の状況を年ごとにたどってみ

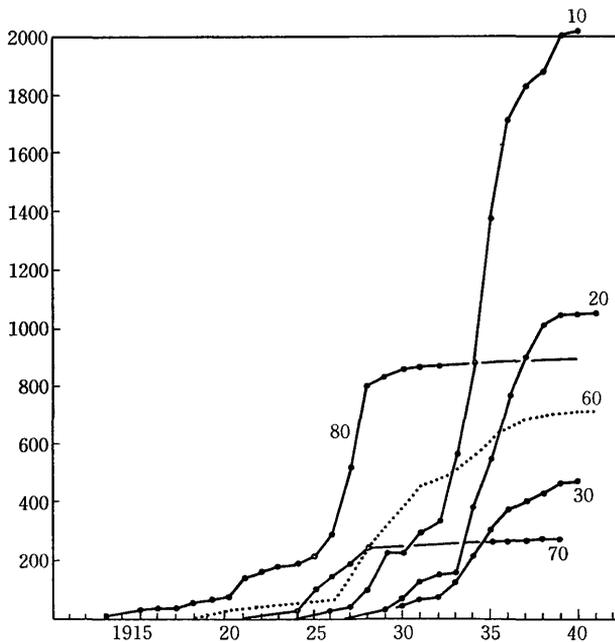


図3 AM 分類別件数の累積過程

タテ軸は件数。図中の折線は AM 分類による各項目の累積状況を示す。

- | | |
|----------------|------------------|
| 10 衣食住にかかわるもの | 20 生産にかかわるもの |
| 30 通信運搬にかかわるもの | 40 団体生活にかかわるもの |
| 50 通過儀礼にかかわるもの | 60 信仰行事にかかわるもの |
| 70 娯楽遊戯にかかわるもの | 80 縁起物、玩具にかかわるもの |

表5 国内標本の内訳別推移

(実数以外の数は%)

採集年	分類 (実数)	10	20	30	40	50	60	70	80	90	計
		衣食住関係	生産関係	運通搬信関係	生団活体関係	儀通礼過関係	行信事仰関係	遊娛戲楽関係	縁玩起物具	その他	
1912まで	5	—	—	—	—	—	—	40.0	60.0	—	100.0
1912—1917	33	—	—	—	—	—	14.3	3.6	82.1	—	100.0
1917—1922	166	1.2	0.6	—	—	—	15.7	7.2	75.3	—	100.0
1922—1927	312	2.9	0.3	—	—	—	11.2	40.4	45.2	—	100.0
1927—1932	1554	18.9	8.0	3.9	—	0.2	25.9	6.2	36.6	0.3	100.0
1932—1937	2632	53.5	24.2	12.0	0.4	0.5	7.3	1.1	0.2	0.8	100.0
1937—1942	912	37.5	44.8	10.4	—	0.1	6.2	0.5	0.2	0.3	100.0
計	5614	2055	1172	470	11	16	715	273	873	27	
計の百分比	100.0	36.6	20.9	8.4	0.1	0.3	12.7	4.9	15.6	0.5	

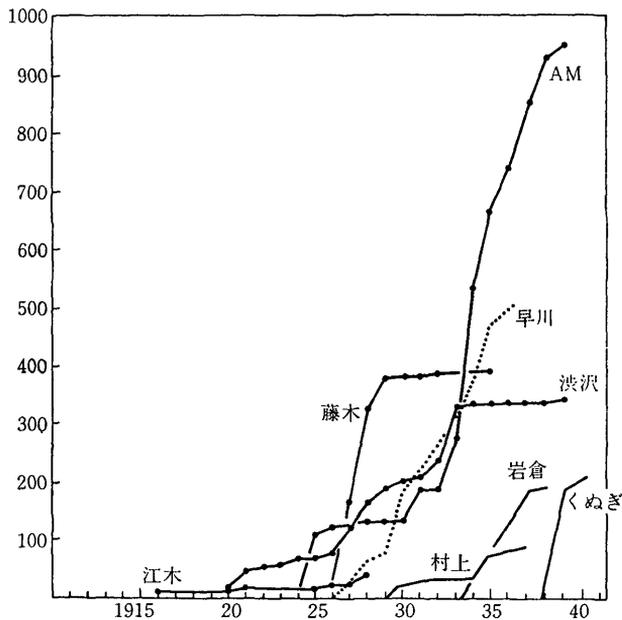


図4 収集者別累積状況
 タテ軸は件数。図中の折線は各収集者の収集標本件数の累積を示す。

ると、いっそうよくわかる(図3)。縁起物・玩具類は1922年頃まで全体の7割以上をしめたが、1927年までの段階では全体の4割代となり、1942年までの収集数のわずか15.6%をしめるだけになる。

この前後2区分を原簿にあらわれた採集者の面からみると、前半期は藤木喜久麿氏が活躍された時期、後半は早川孝太郎氏をはじめAM同人たちが活躍した時期ということになる(図4)。まえの時期の例と同じように書き抜いてみよう。ひとりあたりの収集の数も採集の地域的ひろがりも格段にましてゆく。

1927年—1932年

AM 13・3 22・3, 20・40 22・11, 06・10

明石照男 03・29 [E]

第1銀行支店 22・4 28・16 22・14 28・3 40・1 [E]

江木盛雄 29・2 05・3 28・1, 06・5 13・4 22・2 [A]

早川孝太郎 03・2 13・1, 21・1 22・23, 03・3 04・2 08・2 21・5 22・21, 22・25 23・1, 03・1 04・2 13・1 21・3 22・104, 20・4 22・12 [B]

藤木喜久麿 07・1 11・8 12・17 13・66 14・15 16・1 23・1 25・2 26・1 28・36 29・7 30・1 31・1 34・1 38・1 42・2 43・2 46・1, 03・1 04・1 11・30 13・84 14・2 15・1 21・3 22・5 23・6 26・2 28・7 29・3 31・4 34・3 37・3 38・3 44・2, 02・1 03・2 04・2 05・1 06・2 13・38 17・1 29・1 34・1, 08・2 13・5 28・10 44・7 [B]

藤原三治 05・12 [D]

伊波普猷 28・3 47・8 [E]

近藤勘治郎 15・14 [D]

村上清文 13・21 11・1 13・6 22・1 [B]

鍋島春雄 42・23 [E]

中川行秀 08・2 11・12 12・1 13・18 14・2 20・2 28・3 30・1 30・1 38・1, 11・1 12・1 40・12 [C]

中谷治宇二郎 03・11 [E]

中山 正 22・24 [E]

小田内通敏 36・7 [E]

太田孝太郎 05・14 [C]

佐々木喜善 05・33 [C]

佐治祐吉 07・24 09・3 13・11, 07・12, 07・5 12・1 [C]

渋沢 13・6 14・1 15・2 20・1 21・1 22・6 23・1 25・1 27・2 35・6 47・17, 02・2 21・2 22・28 28・2 40・10, 11・2 13・6 22・5, 13・4 22・9 42・1, 21・1 22・9

高橋文太郎 13・3, 13・1 [B]

なおこの時期の原簿には柳田国男、折口信夫、金田一京助、宮本勢助、岡正雄、武井武雄、上原専禄の方々の名もみえる。

第2期の終りまでに集められた民具の数は、第3期の終りまでに集められたその40%にも達するが、それらの素材から何をよみとり、何をまとめることができるのか。AM 内部ではそうした点をめぐって図録出版の計画がおこり、やがてそれが『民具蒐集要目』[AM 1936: 1-16] や『民具問答集』[AM 1937: 1-319] のような現在でもなお民具の研究の大切な指針ともなるようなものへとつながってゆく。渋沢敬三氏は「素人であるからよくは解らないが、自分等が特殊の敬愛と同情をもつ民俗学に、いままで生物学的とでもいいたいような、実証的研究法があまり用いられておらぬことを、いささか不満に思っていた……。」[宮本 1938: 8] が、そうした綿密な実証的方法を重んじる気風のうちから、新しい言葉としての民具への概念規定が次第に明確になってゆき、それとともに民具全体の輪郭が浮びあがり、おどろくほど短期間に、AM 独自の研究法と民具収集の方式を確立していった。

それはもちろん、集めた標本資料としての民具の内容の深さ、はばひろさとも係わりあっていた。

3. 第3期 1933年—1937年

1933年からの4年間、一時的に停滞していた累積の速度は再び急上昇をはじめ、第2の成長期、いや、むしろ収穫期をむかえつつあった。AM では民具研究のほか、三津内浦浜方文書を中心とする水産史料などの社会経済史の研究部門がいつそう注目すべき成果をあげつつあった。

5年ごとに都道府県別に原簿の民具採集の累積数をまとめ、さらに地方別に合計してみると表3がえられる。この表によれば、1932年までの各期では採集の中心は関東、東北地方におおきくかたより、長野や愛知、静岡などの中部地方からの採集例がふえつつあったが、第3期にあたる期間では、有名なあしなかの調査によって新潟など北陸地方のものがふえ、いっぽう岩崎卓爾氏や岩倉市郎、永井竜一といった方々の努力によって南西諸島や沖縄の採集品がおおきな割合をしめるようになり、やがて九州沖縄地方の民具は、それまでのAMの採集の重点地域だった東北や中部地方とならぶほどの量(全体の集積の15%)にまで達することになった。

いま採集地の都道府県別5年間累積数がどれほどの偏りをもつのか、5年間に1点も集らなかった県が全体の3割近くもあり、20点未満の県が60%、その反面100点以上、300点以上のものが5%みられる。そこで図5の階段わけにしたがって、その様子を地図上におとしてみると、第1期にあたる期間から第3期にあたる期間まで、終りになるにしたがって採集地がひろがり、大口の採集件数をもつ地方が多くなり、採

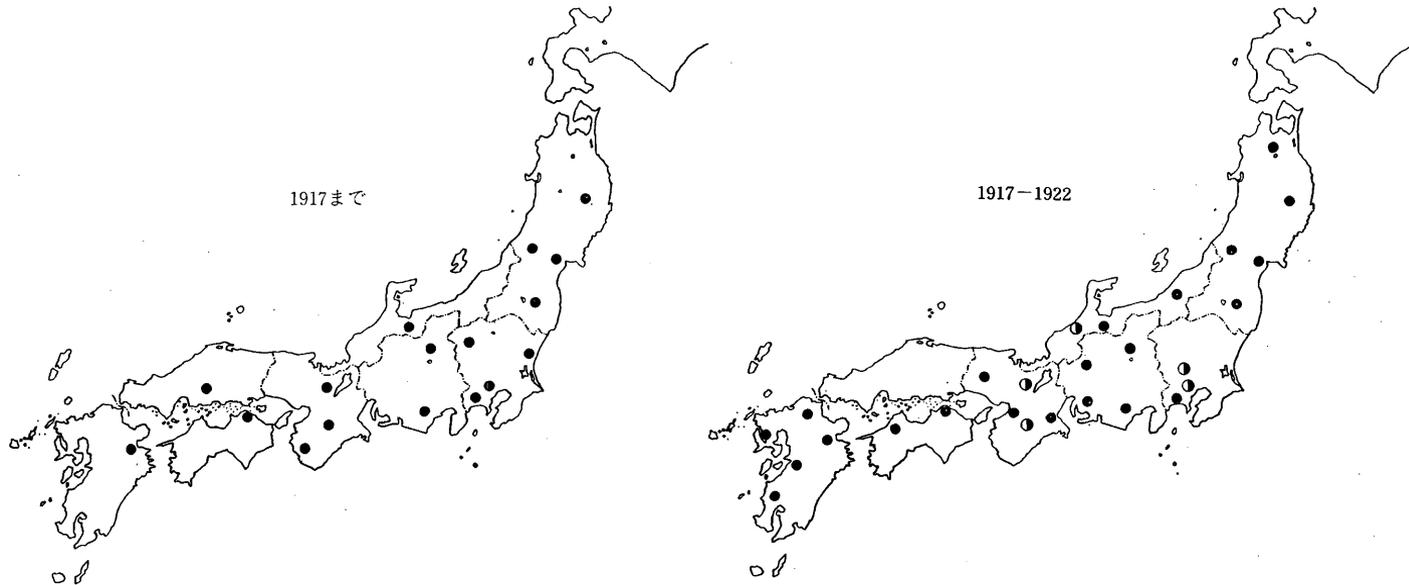


図5 収集地域のひろがり
5年間県別収集件数の移りかわりを示す。破線は地方のさかいを示す。

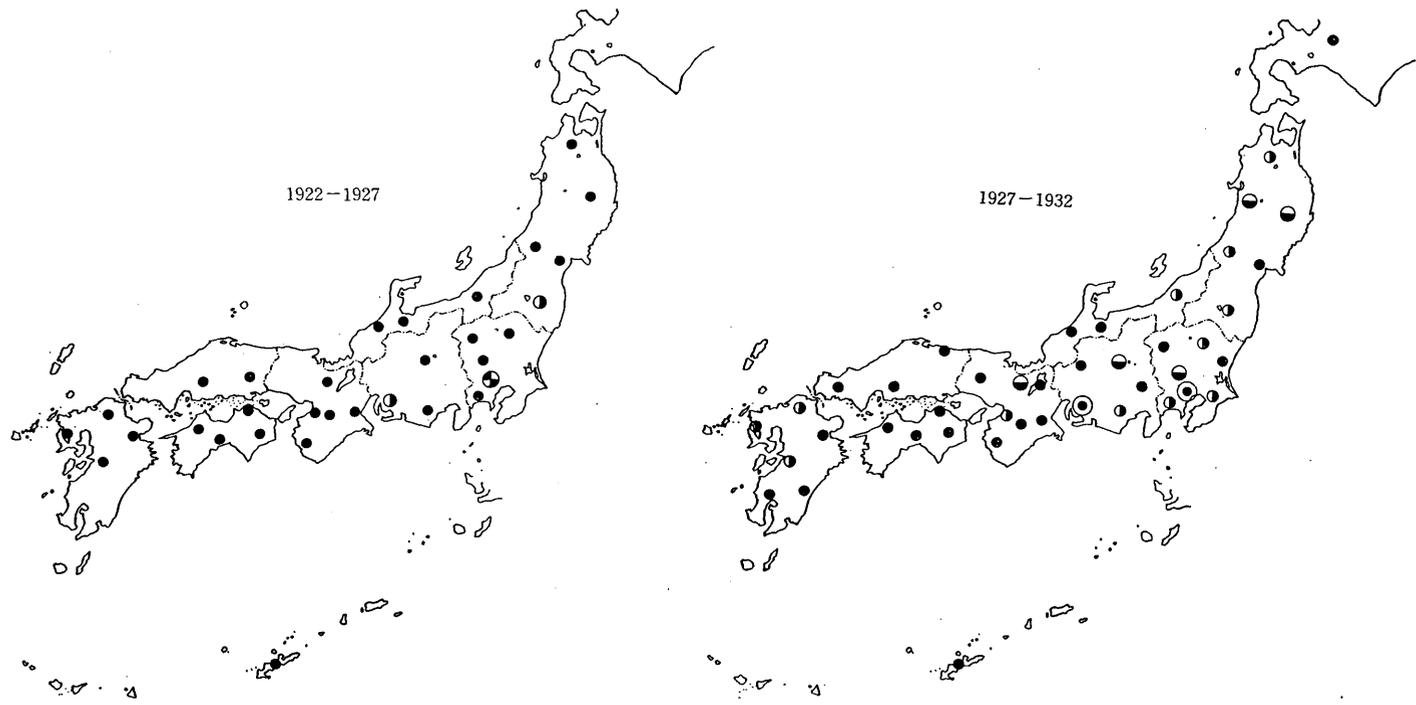


図 5

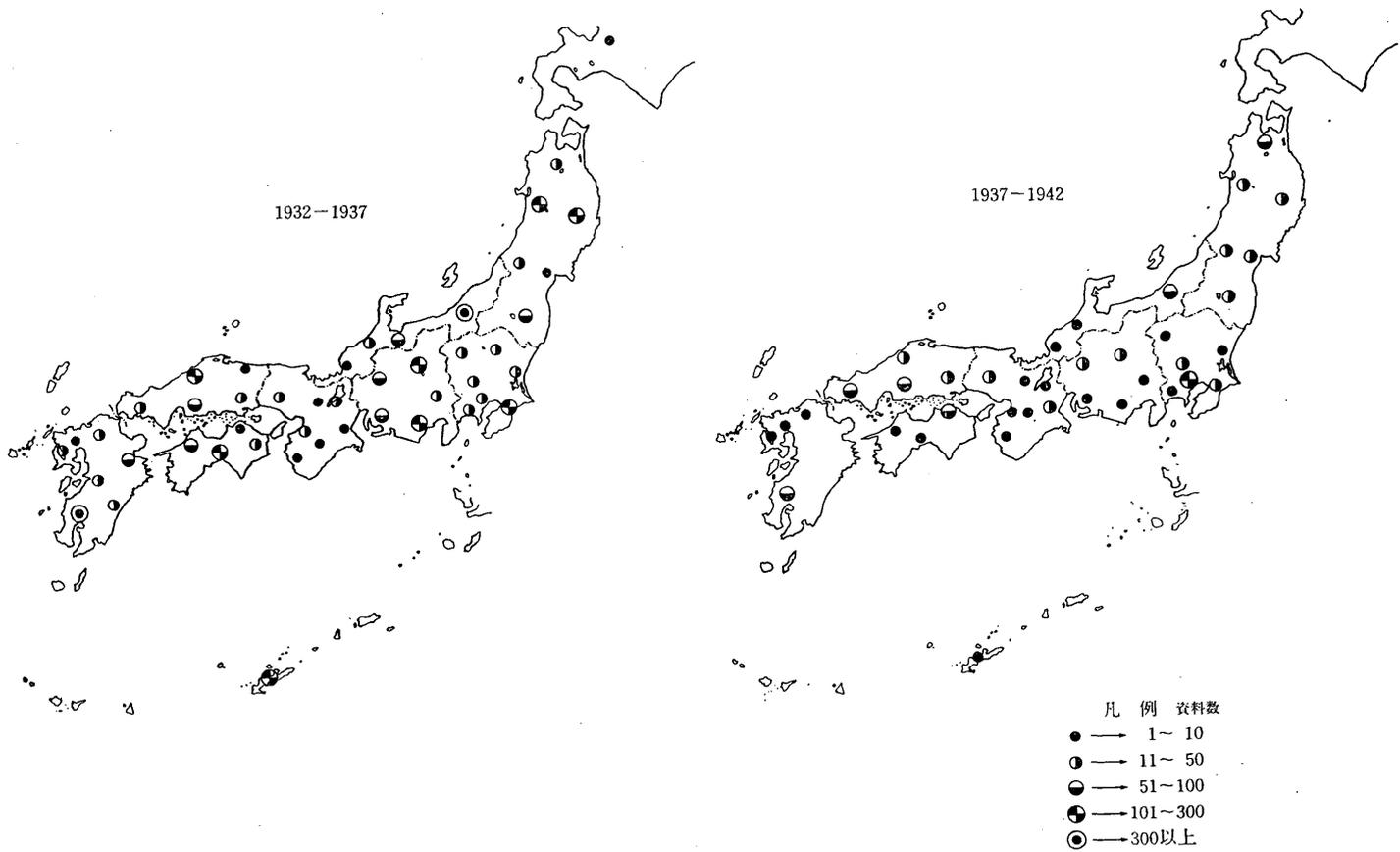


图 5

表6 採集者別収集件数の変化

(実数以外の数は%, 敬称略)

採集者 採集年	(実数合計)	渋沢 敬三	AM 同人*	藤木喜久磨 早川孝太郎	その他	計
1912まで	6	—	—	—	100.0	100.0
1912—1917	28	3.6	—	—	96.4	100.0
1917—1922	165	27.9	0.6	—	71.5	100.0
1922—1927	313	12.1	39.6	3.6	44.7	100.0
1927—1932	1584	7.9	4.2	37.0	50.9	100.0
1932—1937	2866	4.4	23.3	10.4	61.9	100.0
1937—1942	1040	0.6	8.9	—	90.5	100.0
計	6002	341	954	894	3813	
計の百分比	100.0	5.7	15.9	14.9	63.5	

* 渋沢敬三、藤木喜久磨、早川孝太郎も AM 同人にはちがいないが、ここでは台帳に AM または AM 同人と記入されているものを示す。

集の密度がたかまる様子がうかがえる。

第3期の終りちかく、鹿野忠雄氏によって台湾高山族その他の民具 300点余りがまとまっておくられてきている。それは1人の採集によって同じ地方から年間に集められたもののなかでも数が多く、質量ともにすぐれた収集として現在でも貴重な資料のひとつとなっている。こうした国外でのまとまった資料収集の方式は民族学的資料収集ににっかわしい形態であるが、そうした方式はつぎの新しい時代に受けつがれ、国内の収集方式にも影響をあたえた。

第3期を採集者についてみれば、第2期の藤木喜久磨氏や早川孝太郎氏のように1人あたりの採集量がきわだってたかい例が少なくなったかわりに AM 同人の比重がたかまり、渋沢先生を中心に高橋文太郎、村上清文、磯貝勇、小川徹、宮本馨太郎諸先生が核になり、各地域の支持者、研究者と密接に協力しつつ研究をすすめてゆく体制が定着しつつあったことがわかる。

1932年—1937年まで

AM 03・2 04・25 15・37 22・24 23・8, 03・5 08・1 09・25 19・11 21・14
24・6 31・23 34・11 46・154, 03・1 05・20 08・10 15・33 17・40 22・23 25・2
26・4 32・5, 15・23 30・9 36・12 38・4 39・17

会津銀行 07・36 09・1 [E]

浜田国義 46・4 46・44 [C]

祝宮 静 44・11 [C]

箱山貴太郎 10・5 20・11 [E]

早川孝太郎 20・2 21・1 22・7 26・1 40・1 44・16, 02・4 08・30 10・1 12・3

15・27 25・1 27・3 40・2, 38・26 40・20 45・27, 05・4 35・1 40・9 43・14
46・18 47・52, 07・11 10・1 44・4 46・1 47・3 [B]

藤木喜久磨 14・1 21・3, 29・1, 13・1 32・2 [B]

藤原三治 05・2 [D]

古野清人 09・9 12・1 15・1 [E]

市川信次 15・2, 15・11 16・3 23・15, 10・2 15・33, 15・1 17・2 [C]

岩井いさ 32・18 [E]

磯貝 勇 30・1 34・8, 30・4 32・2 34・38 36・1 39・4, 03・1 05・1 06・1
20・1 21・2 34・1, 14・1 [B]

岩倉市郎 15・9 46・11 46・116 [B]

岩崎卓爾 47・66 47・1 [E]

金子総平 07・3 09・2 10・2 11・1 15・6 20・3 36・2 38・3, 07・1 15・9 20
・2 31・4 [C]

小林守治郎 10・43 [E]

小井川潤次郎 02・8, 02・18 05・1 [E]

村上清文 13・1 15・1, 05・1 11・1 15・39 19・1, 23・15 [B]

向山雅重 20・7 [E]

宮本馨太郎 07・2 13・2 21・5 37・1 40・2 [B]

宮本常一 29・11, 29・3 [D]

武藤鉄城 03・4, 03・39, 03・10, 03・3 [D]

永井竜一 46・28, 47・1, 32・2 46・1 [C]

桜田勝徳 山口和雄 23・11 32・17 36・2 40・1, 33・7 36・16 39・11

渋谷敬三 15・2 20・1 21・32 34・3, 03・30 13・2 20・4 22・5 26・1 32・29
40・9, 22・2, 16・1 40・1 [C]

斉藤善治 05・22 [D]

佐藤 05・23

高橋文太郎 46・4, 23・27, 03・10 [B]

田中喜多美 05・79, 05・6 [D]

竹内好美 20・10 [D]

知里真志保 01・2, 01・16, 01・18 [B]

丹田二郎 15・10 [D]

うさぎや 07・3 10・3 11・1 12・42 [E]

八基村(埼玉県)青年団 11・37 [E]

吉田三郎 03・10 [D]

吉岡高吉 39・8, 39・31 [E]

1937年—1942年

AM 13・3 25・11 33・34 36・6 37・66, 03・4 15・7 21・12 25・21 30・14,
23・22 25・3

岩倉市郎 46・58, 46・1 47・1 [B]

金子総平 15・9, 07・4 15・2 [C]

川田 杰 02・72 05・27 06・12 [E]

村上清文 11・6 [B]
宮本馨太郎 20・1, 10・2 14・1 [B]
宮本常一 29・3, 02・7 27・1, 02・1 05・2 40・1 46・2, 36・1 39・1 [C]
永井竜一 46・4 [B]
渋沢敬三 28・3, 23・1, 32・5 [A]
進藤松司 34・29, 34・2 [D]
田村正徳 35・65 [C]
田中 32・40
うさぎや 04・3 12・2 15・1 19・3 20・5, 04・29 08・7 10・2 11・1 12・6,
04・3 12・9 [E]
牛尾三千夫 32・9 [E]

第3期の採集民具を内容別にみると、あしなかの調査のせいか履物を含む衣食住関係の割合が全体の53.5%にもおよび、後半では生産に係わる民具もかなりふえ、交通・運搬関係の民具も10%にたった(表5)。これらの民具が土台になって日本民族学会移行後に本格的な民具研究の成果がつきつぎに出されることになる。

第3期、さきの鹿野忠雄氏の場合のように、ある年、ある地域からかなりの数の民具がまとまって採集される傾向が目だつようになる。AMでは、村上清文氏の新潟県三面の調査のように1年以上住みこんでひとつの地域を調べるといった試みもなされた。さらに、薩南十島の総合調査をはじめ、AMの同人による探訪が全国的にくりひろげられ、それが第3期の収集数増加へのひとつの要因ともなる。また、『武蔵保谷村郷土資料』、『秋田マタギ資料』、『男鹿寒風山麓農民手記』、『羽後角館地方に於ける鳥虫草木の民俗学的資料』、『喜界島調査資料』のようなすぐれた記録づくりがすすめられつつあったが、そうした試みには多かれ少なかれ民具の収集がともなっていた⁴⁾。

およそ累積曲線には、はじめ急速に昇りやがて成長速度をよわめてゆく収穫てい減型(凸型)や、はじめゆるやかに昇り、終りになり次第急激に上昇する加速度成長型(凹型)、それに一定率で終始伸びつづける対角線型(直線型)などがある。標本資料としての民具の収集にみるAMの成長は2番目の、最終段階の第3期にもなお成長をつづける加速度成長型であった。

AMの民具研究は、1937年10月、活動体制ともども収集された民具とともに東京保谷の新しい博物館におおむね引きつがれていった。1937年当時、AMには整理の途中だった民具が原簿にのせられないまま、かなりの数のこされていた。それらは原簿の10,000番以後にのせられているので、つぎの機会にとりあげたい。

4) 註1)参照。

謝 辞

電算処理についてお手数をおかけした情報管理施設技術室の方々，とりわけ吉崎幸二主任，それに当時国立民族学博物館第5研究部におられた（現京都大学情報教育センター）八村廣三郎助教授に心からお礼を上げたい。

文 献

アチック・ミュージアム (AM)

1936 『民具蒐集調査要目』。

1937 『民具問答集第一輯』 アチック・ミュージアム，pp. 1—319。

石田英一郎

1960 「みんぞくがく（民族学）」 財団法人日本民族学協会編 『日本社会民俗辞典第4巻』 pp. 1404—1411。

宮本馨太郎

1963 「民具研究の回顧と展望」 『物質文化』2，物質文化研究会，pp. 1—22。

附表1 収集年次別地域別標本数（国内）

地域 収集年次	北海道	東北	関東	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	計
不明	9	39	90	46	28	47	21	14	15	4	313
1912まで	—	—	3	—	—	1	—	—	2	—	6
1912	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	4
1913	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1914	—	—	1	—	1	—	1	—	—	—	3
1915	—	5	2	—	3	5	—	1	—	—	16
1916	—	1	2	2	—	—	—	—	—	—	5
1917	—	1	—	1	1	—	—	—	—	—	3
1918	—	12	7	4	4	5	—	1	5	—	38
1919	—	—	1	—	1	9	—	1	—	—	12
1920	—	1	17	—	—	2	—	—	2	—	22
1921	—	10	20	10	5	37	—	—	8	—	90
1922	—	12	6	5	—	4	2	4	1	—	34
1923	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1924	—	16	18	—	—	—	1	2	—	—	37
1925	—	2	94	5	5	6	—	5	4	—	121
1926	—	13	57	4	26	7	—	3	7	4	121
1927	—	35	142	14	52	83	10	8	37	18	399
1928	5	57	151	9	142	36	12	11	20	7	450
1929	3	30	99	19	60	8	1	1	15	—	236
1930	—	10	53	4	140	10	—	—	22	7	246
1931	—	148	8	1	83	5	—	3	5	—	253
1932	—	2	8	3	51	2	3	—	27	—	96
1933	1	207	11	104	74	10	38	1	61	—	507
1934	2	113	66	16	80	12	96	31	205	1	622
1935	16	85	81	178	199	48	52	24	105	118	906
1936	25	49	125	106	66	25	42	105	187	5	735
1937	—	13	53	21	1	16	128	76	64	1	373
1938	—	25	22	27	41	47	61	2	4	1	230
1939	—	164	136	23	29	6	3	—	15	—	376
1940	—	7	6	1	—	4	26	—	3	—	47
1941	—	—	—	—	—	1	9	4	—	—	14

附表2 収集年次別地域別標本数(国外)

地域 収集年次	朝鮮半島	中国大陸	台 湾	モンゴル	サハラ	シベリア	東南アジア	南西アジア	アフリカ ヨーロッパ	アメリカ 大陸	ミクロネ シア	オーストラ リア ポリネシア	計
不明	—	38	26	—	1	—	3	1	7	—	—	—	76
1912まで	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
1912から 1917まで	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1917	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
1918	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1919	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1920	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1921	18	30	—	—	—	—	4	2	2	—	—	—	56
1922	—	32	—	—	—	—	2	15	3	1	—	1	54
1923	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
1924	—	—	—	—	—	—	—	—	15	1	—	—	16
1925	—	1	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	3
1926	5	4	5	—	—	—	—	—	1	—	—	—	15
1927	30	74	—	—	—	—	1	—	11	—	3	—	119
1928	1	25	2	—	—	—	—	6	6	1	—	—	41
1929	43	2	9	—	—	8	—	2	11	—	—	1	76
1930	—	9	1	—	—	—	19	—	—	—	—	—	29
1931	13	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15
1932	48	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	48
1933	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9
1934	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1935	34	2	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	45
1936	189	8	25	—	4	—	—	—	—	—	—	—	226
1937	7	5	393	—	—	—	—	—	4	—	—	—	409
1938	18	—	5	—	—	—	—	—	—	—	4	—	27
1939	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
1940	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1941	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1942	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
1943	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2

附表3 都道府県別5年間累積数

県	収集年次						県	収集年次						
	1917まで	1917 1922	1922 1927	1927 1932	1932 1937	1937 1942		1917まで	1917 1922	1922 1927	1927 1932	1932 1937	1937 1942	
北海道	—	—	—	8	4	—	滋賀	—	—	—	4	17	9	
青森	—	2	3	49	32	89	三重	—	1	1	6	10	35	
秋田	—	—	—	72	164	12	歌	1	—	3	7	8	6	
山形	3	9	9	24	15	36	奈良	2	25	2	6	4	1	
岩手	1	5	2	83	185	41	大	3	16	7	81	1	3	
宮城	1	3	6	7	2	16	兵	—	10	4	30	16	5	
福島	1	5	23	45	58	15	庫	—	1	—	8	41	15	
茨城	2	—	—	6	17	7	取	—	—	—	8	9	—	
栃	—	—	2	13	43	—	根	—	—	—	—	105	37	
群	1	—	1	8	26	8	山	—	—	2	—	19	34	
埼	—	17	1	71	49	32	島	1	—	1	10	67	90	
千	—	—	—	23	123	34	口	—	—	—	5	31	66	
東	7	24	168	310	14	130	愛	—	1	4	8	43	8	
神奈川	2	4	3	22	19	6	媛	1	1	6	6	3	66	
新潟	—	1	7	40	304	65	川	—	—	1	3	13	—	
富山	2	1	3	1	55	—	島	—	—	3	6	102	8	
石川	—	13	4	6	45	5	知	—	4	1	31	48	6	
福井	—	—	—	—	3	2	岡	—	—	—	—	5	1	
山梨	—	—	—	4	18	10	賀	—	1	2	32	25	9	
長野	3	6	3	72	112	17	崎	—	2	7	12	25	—	
静岡	1	2	1	22	165	10	本	—	3	2	8	65	—	
愛知	—	2	27	370	88	3	分	—	—	—	9	30	—	
岐阜	—	1	—	9	87	21	崎	—	5	—	7	387	70	
							島	—	—	—	—	—	—	—
							沖	—	—	4	32	124	2	

中村 テツウ・ミエタの足跡

附表4 収集年次別AM分類別標本数(国内のみ)

(コードは附表5による)

AMコード	11	12	13	14	15	16	17	18	19	21	22	23	24	25	26	27	28	30	40	50	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	80	90
不	7	3	4	6	30	35	1	—	—	5	3	7	21	21	3	1	10	19	—	—	2	6	2	—	6	3	—	10	2	7	205	3
明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1912まで	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1912	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1913	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1914	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1915	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1916	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1917	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1918	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1919	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1920	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1921	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1922	—	1	—	1	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1923	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1924	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1925	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1926	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1927	—	1	—	3	4	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1928	—	1	1	1	14	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1929	4	10	3	5	25	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1930	7	9	12	26	20	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1931	5	16	4	11	23	24	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1932	3	6	11	4	2	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1933	9	15	12	17	83	94	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1934	11	13	37	19	69	153	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1935	7	7	50	16	73	348	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1936	10	8	46	24	66	156	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1937	7	7	20	20	26	46	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1938	—	4	3	11	25	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1939	—	3	8	—	14	97	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1940	—	—	3	1	8	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1941	—	1	3	1	1	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

附表5A AM 民具分類体系

[AM 1936: 1-16] による

- 10 衣食住に関するもの
 - 11 家具
 - 12 灯火用具
 - 13 調理具
 - 14 飲食具
 - 15 服物
 - 16 履物
 - 17 装身具
 - 18 出産育児用具
 - 19 保健衛生用具
- 20 生産に関するもの
 - 21 農具
 - 22 山樵用具
 - 23 狩猟具
 - 24 漁撈具
 - 25 紡績色染具
 - 26 畜産用具
 - 27 交易用具
 - 28 その他
- 30 通信・運搬に関するもの
- 40 団体生活に関するもの
- 50 通過儀礼に関するもの
- 60 信仰・行事に関するもの
 - 61 偶像
 - 62 幣帛類
 - 63 祭供具・供物
 - 64 楽器
 - 65 仮面
 - 66 呪具
 - 67 卜具
 - 68 祈願品
 - 69 その他
- 70 娯楽・遊戯にかかわるもの
- 80 縁起物・玩具
- 90 その他

附表5B 都道府県コード

- | | | | |
|--------|----------|--------|----------|
| 北海道—01 | 新 潟—15 | 鳥 取—31 | 福 岡—40 |
| 青 森—02 | 富 山—16 | 島 根—32 | 佐 賀—41 |
| 秋 田—03 | 石 川—17 | 岡 山—33 | 長 崎—42 |
| 山 形—04 | 福 井—18 | 広 島—34 | 熊 本—43 |
| 岩 手—05 | 山 梨—19 | 山 口—35 | 大 分—44 |
| 宮 城—06 | 長 野—20 | 愛 媛—36 | 宮 崎—45 |
| 福 島—07 | 静 岡—21 | 香 川—37 | 鹿 児 島—46 |
| 茨 城—08 | 愛 知—22 | 徳 島—38 | 沖 縄—47 |
| 栃 木—09 | 岐 阜—23 | 高 知—39 | |
| 群 馬—10 | 滋 賀—24 | | |
| 埼 玉—11 | 三 重—25 | | |
| 千 葉—12 | 和 歌 山—26 | | |
| 東 京—13 | 奈 良—27 | | |
| 神奈川—14 | 京 都—28 | | |
| | 大 阪—29 | | |
| | 兵 庫—30 | | |